

スタンフォードでの語らい

大阪大学医学部附属病院 遠地 志太

1. 学会の国際化について

日本において「国際化」とは、一般的に「英語化」を意味すると思われる。現に、日本放射線技術学会では、2008年から英語論文誌(日本医学物理学会と共同)の発刊が始まり、昨年には国際放射線技術科学会議が開催され、学会発表、質疑応答が全て英語で行われるようになり、学会の英語化が徐々に進んできている。このような学会の流れを、筆者は大きく反対はしない。企業ではすでにグローバル化は進んでおり、日本に居ながら英語を使用している会社もあると聞いている。我々も英語を使えるようになると、活躍の場が広がると同時に、臨床現場でも役に立つことは間違いない。しかし、学会としての英語化の割合は小規模(全体の1~2割程度を英語発表セッションとする)で充分であると考えている。日本での英語発表は、海外学会(RSNAやECRなど)での口頭発表に挑戦するための練習の場となれば良いと考える。日本の優れた研究を海外へ発信するためには、海外学会で報告すべきであり、それによって世界への認知に繋がるはずである。日本の研究が世界に認知されれば、海外の研究者が日本の学会に参加する機会も増えると思われる(日本でしか得られない情報があれば、海外の研究者も日本語を勉強するはずである)。「日本でしか出来ない」、「日本のあの施設(研究室)でしか出来ない」と思わせるほどの魅力的な研究を続けるためにも、研究の詳細を日本語で議論し、検討し合うことは、英語化以上に重要であると考える。国内外問わず、自由に参加し、交流できる学会にすることこそ「国際化」なのではないかと筆者は思う。

2. 学術大会のあり方について(私たちが目指すべき学会)

筆者が考える学術大会の成功は、数多くの参加者が自身の研究成果を発信し、全ての会員がそれらを共有できること、さらに最新の研究情報を取得し、臨床現場への活用を考えることができる事である。しかし、参加者の多くは病院勤務であり、臨床を優先せざるを得ないため、大会期間に毎回参加できるとは限らない。これが問題ではないかと思う。そこで、現在も利用されているインターネットからの発表スライド閲覧に加え、サテライト会場での大会開催も良いと思う。そうすることで、学術大会への参加者を増やすことができる。特に、毎年4月に開催される総会学術大会は、日本医学放射線学会、日本医学物理学会との共同で行われるため、医師や物理士(理学者・工学者)と言った技師とは異なった視点の研究にも触れる事ができる。研究者の多くは先進性・専門性を追求し、どうしても狭い視野になりがちである。我々技師は、「医学・医療」と「理学・工学」の両方を学び、それらを臨床現場に巧みに利用することが求められる。これを実現させるためにも、現在活発に研究している中堅層だけではなく、今後活躍が期待される新人も積極的に参加できる学術大会を目指したい。

3. 研修で得たことを今後どのように活かすか

本研修では、現在の海外における最新情報を得ることができた。また国内の学術レベルと比較し、日本でも十分やっていけることも感じ、自分の研究に自信を持つことが出来た。この経験を今後にどう活かすことが出来るのか、現時点での具体的な考えはない。ただ、今自分が取り組んでいる研究を直向きに頑張り続け、個のレベルを少しでも上げることが最善であると考える。研修で知り合えた海外の研究者・教育者を見習うこと、それ以上に、研修で出来た新たな仲間たちと共に助け合い、またお互いに刺激し合うことで、今後の研究活動・臨床検査に活かしていきたいと思う。最後に、筆者は本研修の「初」の落第者になりかけた。未来の研修参加者が無事修了出来るように心から祈っている。



研修“初”の落第者になりかけた筆者(左)とMoseley先生(右)。修了証授与の際、手違いで私の修了証ではなく、別の名前のものが用意されていました。写真は、Moseley先生が修了証を作る時間を稼いでいるときのもの。おかげで、みんなとは少し違った特別な修了証になりました。